

新渡戸稲造における維新と伝統

——日本論・神道論を手がかりに——

佐藤 一 伯

はじめに

筆者は以前、加藤玄智の神道・日本研究について考察し、加藤の研究がバジル・ホール・チェンバレンら西洋日本学者の刺激を受けたもので、日本人による日本論や日本学の構築に向けての、強い使命感を宿していたことに触れ、新渡戸稲造が英文で『武士道』を著した動機との共通性を指摘した。⁽¹⁾さらに、新渡戸稲造が明治天皇を「道徳上の教師」と慕う思いが近代の日本人に共感されていたことや、大正期における明治神宮創建論との関連について若干の考察を試みてきた。⁽²⁾しかしながら、新渡戸稲造の日本論や神道論の全容については、必ずしも十分な検討を行ってこなかった。そこで本稿では未熟ながら、近代の日本論・神道論研究の一環として、新渡戸稲造（文久二年〔一八六二〕～昭和八年〔一九三三〕）の日本論・神道論について英文著述

を中心に検討したい。⁽³⁾

松下菊人氏は新渡戸稲造の著作を、①農学（『農業本論』など）、②教育（『東西相触れて』など）、③啓蒙（『修養』など）、④英学（*Bushido, the Soul of Japan* など）に四分類している。⁽⁴⁾本考察の主たる対象は④の英学者としての作品であり、とくに『*The Intercourse between the United States and Japan: An Historical Sketch*（『日米関係史』、一八九一年）』『*Bushido, the Soul of Japan: An Exposition of Japanese Thought*（『武士道 日本之魂——日本思想の解明』、一九〇〇年）』『*The Japanese Nation, Its Land, Its People, and Its Life: With Special Consideration to Its Relations with the United States*（『日本国民 その国土・民衆・生活——合衆国との関係をとくに考慮して』、一九二二年）』『*Japan: Some Phases of her Problem and Development*（『日本——その問題と発展の諸局面』、一九三一年）』『*Lectures on Japan:*

An Outline of the Development of the Japanese People and Their Culture (『日本文化の講義——日本国民とその文化の発達に関する概説』一九三六年)などが注目される。このうち著名な作品である『武士道』をめぐっては、菅野覚明氏が「明治国家における国民道徳・民族精神を、比較文明論的な視点からとらえようとする議論」であって、「西洋諸国の『自我』や『道徳主義』つまりは国家意識と、日本のそれとの接触・対峙のさまを示すキーワードであった」と、日本に関する比較文明論として位置づけており、本考察において示唆的な視点である。もっとも、笠谷和比古氏が指摘するように、「武士道」の語なり概念は必ずしも近代の創造であったわけではなく、欧米諸国の読者への理解を助けるため各国の事例や聖書を比較の材料に供して「日本社会の中で育まれた独自の文化伝統」の解明に寄与した点についても適切な評価が必要であらう。⁽⁶⁾ これらを念頭に、新渡戸の比較文明論的視点について、昭和期の講演録を手がかりに確認することから始めたい。

一、『西洋の事情と思想』の英学的維新論

新渡戸の歿後に出版された昭和三年早稲田大学での講演録『西洋の事情と思想』(実業之日本社、昭和九年。以下の引用は『新渡戸稲造全集』第六巻、教文館、昭和四十四年)は、

先の分類では教育ないし啓蒙書と見なし得る作品ではあるが、円熟した英学者・比較文明論者としての日本論・神道論、さらには明治天皇論の特色を端的に確認する上でも重要と思われる。新渡戸はこの中で、東西の文明・思想を比較する目標を、「広い意味のモラル……我が国民性」の欠陥を明らかにすることに置く(五六九頁)。そして歴史上の「二つの維新」(大化・大宝時代と明治維新)の共通点に、天皇の権威の高揚(王政復古)、外国の思想文物の輸入、人民が自由を得たこと(デモクラシー)の三つを挙げ、「どうしたならば、この三つの日本歴史の特徴を發揮し、応用して、政治、経済、文芸等あらゆる方面に、その進歩を実現し得るであらうか。これが吾々に残された問題である」と提起し、そのために「広く西洋から知識を吸収しなければならぬ」(五七三〜五七六頁)と説いている。では日本の「モラル」(国民性)の特色とは何か。それは「コミュニケーションな、即ち共存的な性質」である(五八四頁)。「コミュニケーション・ライフ即ち共存生活を尊ぶ」ゆえに「行儀作法が確に良くなる」のだが、「我は我たり——といふやうな強いところがない」(五八四〜五八五頁)。これは「宗教にもよく現れてゐる」として、「インディビデュアリスティック」(個人主義的)な西洋のキリスト教と日本の神道の対比へと話が進む(五八六〜五八七頁)。キリスト教が「パーソナル・

レリジョン」、「個人の魂」・「ラヴ」(愛)の尊重など「イントロヴァーシオン」(内向性)の特徴が指摘できるのでに対し、「共存共栄的な生活」を尊ぶ神道は「ソーシャル・インステイチューション」であり、「エキストロヴァーシオン」(外向性)が顕著で、宗教というよりも「コンミュナル・マジック」(カルト)、「祭礼的なもの、詰りリチュアル」としての要素が強いという(五八七―六〇四頁)。「日本人の道德観念は、コンミュナル道德観念」であつて、独立心が乏しい反面依頼心が多いため、家族制度の発達を見た。そして、西洋の個人主義にも利害得失があるものの、「完全な人間にならうとするには、すべてこの両方の長所を採らなくてはなるまい」(六〇六頁)⁽⁷⁾として、日本人の「コンミュナル道德観念」の長短を指摘していく。「よい方はむしろそのまゝ、にしておきたい。親を思ひ、子を思ひ、親族縁者を思ふ心、これが延て愛国心になり、普通にいふポライト、礼儀正しいことになり、言語を慎むことになる」(六〇六頁)。こうした美德は長く維持したいが、独立心の乏しさ、「自分といふことの確信が弱い」ことは「いちばんわれわれの欠点である」という(六〇八―六〇九頁)⁽⁸⁾。その背景として、「日本人の物の考へ方が、多く主観的、サブジェクティブである」一方、西洋人は「オブジェクティブ」(客観的)で「サイアンテフィック」(科学的)な物の見

方をする事が指摘できる。概して西洋人は理性・ラシヨナリテイ(合理性)に富み、東洋人は「インチュイシオン、直覚的、直観的」である(六〇九―六二二頁)。直覚力とは知覚を延ばした五感以上の働きで、明治天皇が「目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけり」と御製に詠まれたのがまさにそれである(六一八―六一九頁)。しかし「直観は一種の天才でなければ、なかなか達しない」(六二二頁)であつて、「遺憾ながら……東洋には、推理の所産である科学がない」(六二六頁)。かといって「東洋固有の直観を棄てて科学にのみ走ることに不賛成である」(同)。「直観はじつに民族の宝である。これを失はないやうに、常に精神はここに土台し、……科学を応用すれば、こゝにはじめて、西洋と東洋の長所を結合したものが出来るであらうと思ふのである。これが私の理想である」(二八六頁)と述べている。このように、新渡戸は維新の達成に向けて日本的(神道的)コンミュナル道德と直観力を土台に、西洋科学を応用することを提唱しており、これが講演の要所といえよう。

さらに、結びの第五章「日本人としての世界観」では、「明治天皇の吾々国民に賜りたる最大の賜物はなにかといへば、吾々が単に臣民としてばかりでなく、国民として、公民として、はたまた市民としてあつて欲しいといふこと

である」(六四三―六四四頁)と説き、『西洋事情』を著した福沢諭吉の功績を念頭に、日本思想の伝達や西洋の長所の採用について「所謂今日世の中で流行る狭い論拠から離れて、もつと広い広い立場から研究していただきたい」(六四六頁)との言葉で締めくくっている。

幕末の福沢諭吉は『西洋事情』巻之一「小引」(慶応二年丙寅七月)において、「余頃日英亜開版ノ歴史地理誌数本ヲ閲シ、中ニ就テ西洋列国ノ条ヲ抄訳シ、毎条必ス其要ヲ掲テ史記・政治・海陸軍・錢貸出納ノ四目ト為シ、……此四者既ニ世人ノ眼目ニ触レハ、コレニ由テ略々外国ノ形勢情実ヲ了解シ、果シテ彼ノ敵視ス可キモノカ其友視ス可キモノカラ弁別シ、友ハ之ニ交ハルニ文明ヲ以テシ、敵ハ則チ之ニ接スルニ武経ヲ以テシ、文武ノ兩用其所ヲ錯ルコトナキニ庶幾ラン乎。此レ余カ是挙ノ目的トスル所ナリ」(原文句読点なし)と、洋学の「実用ノ益」を説いている。かつて丸山真男氏は福沢の『文明論之概略』「緒言」(明治八年)にみられる「一身二生」あるいは「一人両身」という洋学者の自己認識はそのまま維新日本の世界における自己認識でなければならぬ⁽⁹⁾と指摘した。既述のとおり新渡戸は『西洋の事情と思想』の講演を「維新一論」として展開したのだが、その英学(比較文明論)的の日本論・神道論の前提に、福沢諭吉にみられる「一身二生」「一人両身」

という洋学者ひいては維新时期日本人の自己認識を継承する意識があつたことは注目すべき点であろう⁽¹⁰⁾。

二、「武士道」の日本論・神道論とその波紋

昭和初期における新渡戸の日本論ことに神道論について、『西洋の事情と思想』第四章「共存観念と独立心」の「神道は共存的宗教」の節でもう少し確認しておく。この中で「神道を宗教としても、これは個人的の宗教でなく、やはりコンミュナル・マジック」ではないかと指摘した上で、

吾々大和民族の殆ど唯一の、エモーショナル・ライフともいふべきものは、神道によつて来るものである。この神道そのものが、果してコンミュナル・カルトであつたならば、前述の自己^{セルフ}などに重きをおかず、エキストロヴァートの方に力を注ぐのは不思議ではない。そして吾々はエキストロヴァートのよいところを發達させると同時に、他面、今まで怠つてゐたイントロヴァートの強味をも、大いに吸収する必要があるのではあるまいか。この点については、近くは陽明学者なり、また遠くは西洋の宗教なり、哲学なり、文学等から、大いに得るところがありはしまいかといふことを、私は常々考へてゐるのである⁽¹¹⁾。

と述べている。このような神道論がいかに形成・展開した

かという問題意識をもって、代表作『武士道』を繙読すると、第二章「武士道の淵源」で仏教からの平靜・沈着の影響に次いで、神道を次のように説明している。⁽¹²⁾

① 神道はその教義に刻まれた主君への忠誠、祖先への尊敬、親への孝行を供給した。

② 神道に原罪の教義はなく、人の心が本来善であり神のように清浄と信じている。

③ 国土は祖先の霊の神聖な棲所であり、天の力と仁愛を兼備される天皇は権威と国民的統一の象徴である。

④ 神道という宗教（ないし民族的感情）には愛国心と忠義の教義があり、忠君愛国を刺激という直截的な実践方法で武士道に提供した。

さらに道徳的教義上の孔子、孟子、王陽明の影響を指摘して本章を結んでいる。右の神道の説明における文献引用は、ブートミー『英国民』が英国王室について「それは権威の像たるのみでなく、国民的統一の創造者であり象徴である」と述べたのと、アーサー・メイ・ナップ『封建的及び近代的日本』第一巻の「ヘブル文学に於ては、神の事を言つて居るのか国の事を言て居るのか、天のことかエルサレムのことか救主のことか国民そのものことか、之を見分けることは屢々困難である」という記述の二箇所であり、いずれも洋書である。『武士道』に登場する人名は日

本人が西郷南洲・菅原道真・伊達政宗など二〇名程度に對し外国人はシェークスピア・ソクラテス・カーライルなど一四〇名以上にのぼること、新渡戸が少年期より築地外人英学校や東京外国語学校に学び、札幌農学校在学中に家族宛の手紙（明治十二年六月一日付）で「皇漢之歴史等一向無學」を自認していることなどをも踏まえると、新渡戸の日本論・神道論形成には和漢学よりも洋学（西洋日本学）が寄与したことがまず指摘できよう。しかし他方、『武士道』の執筆は「自己の日本人としてのアイデンティティーを主張したい気持」によるもので、「日本精神や大和魂」について「相手の外国人のコンテクストの中で説明することにより、日本人同士では当然自明とされている無言の前提をも言語化する」試みであった。⁽¹⁶⁾この日本人性の無言の前提の形成要因として、一つには盛岡南部藩士新渡戸十次郎の三男に生まれ、祖父傳や父、母勢喜、さらに叔父で養父の大田時敏らの教育によるものがあげられよう。そして一つ、明治初期の大教宣布の影響に注目しなければならぬ。新渡戸は『幼き日の思い出』（一九二三年頃稿）で次のように述べている。

神道信仰を一般に普及するため、一・六日や二・八日に、名の知れた神社では、実際に役立つ基本的な道徳の講義が行われた。叔父の住いから十分足らず歩く

と、こういった神社の一つがあった。「改行」ところで、一八七三年から七四年にかけての冬、たまたま兄〔次兄道郎〕が病氣ばかりしていた。……私は兄の病が癒えるまで、毎朝六時に社の井戸で齋戒沐浴を行おうと自分に誓った。……「改行」ところが数日して、たまたま一人の神官が朝の散歩で井戸の方へぶらぶらとやって来た。……私は感情に動かされやすかったが、決して狂信的ではなかった。また、私の家では宗教的な儀式はほとんど行われなかった。「改行」現代風にいえば、祖父は唯物論者であり、父は懐疑論者で、母の信仰といえは御先祖を祭る（崇拜ではない）ことになったと思う。他の人々が、特定の宗教行事で飾り付けや祝い事をして、私たちの家族はなにもしなかった——いかにも残念なことである。くだんの神官は、私を信心に導けると思ったのか、いや、それよりも面白がっていたのである。彼は神社で講じられていた説教に私を招いてくれた。このようにして、幾分なりとも宗教的なことを聞くように私は導かれたのである。あの精神的不毛の時代に、これは緑のオアシスであった。「改行」人間は誰しも皆自分自身の光であって、また、そうあらしめる能力もあるのだという教義に、私はとくに啓発された。さらに、もし自分自身の

光を恥ずかしめぬよう暮らせば、何事も自在に出来る——他人に何んと言われようとも。この教えは心強いものであった。私は他人の意見に極度に感じやすかったが、ある程度それから免れたのである。⁽¹⁷⁾

『武士道』の神道の記述中、とくに②に示した「人の心の本来善にして神の如く清浄なるを信じ、神託の宣べらるべき至聖所として之を崇め貴ぶ⁽¹⁸⁾」というくだりについては、松隈俊子氏も「少年時代、神官と近づきになり、はじめて「人心は本来善である」ことを教えられ、これをよりどころとして修養に目ざめた彼の体験が、大きくこの解釈に影響していることに注目⁽¹⁹⁾」している。また新渡戸は『西洋の事情と思想』第四章「共存観念と独立心」の中に、

明治維新の頃に神道が盛んに行はれた。各村に教導職といふものをおいて——いはゞ基督教でいふ牧師、仏教で僧侶といったものである——盛んに神道を鼓吹したものである。私が八つ九つの時、神道熱のごく盛んな頃に遭遇したから、いくぶんその方は心得てもあるし、私自身では、神道のために少なからぬ感化を受けてゐる。その時分、神道の主として教へたところは、「祈らずとも神や守らん」といふことで、神は銘々の心に在るといふのである。……明治の初めには、その意味における神道を盛んに鼓吹したものである。こ

れならば、吾々も頗る同感である。社に行つて神あますのではない。銘々の心に神は宿つてゐる。これはコミュニケーションな教ではない。非常にインデビデュアルである。これで行つたならば、恐ろしく強い個人が出来る。所信は所信であくまで貫く。人のために節を曲げない、真直な人が出来たはずである。(改行)けれども、この教は長く続かなかつた。またよしその教が今日なほ存してゐても、勢ひを得ないでゐるだらう。

と、「銘々の心に神は宿つてゐる」という「インデビデュアル」な教えに感化されたことに言及している。新渡戸が兄の病氣平癒を念じて水垢離を取り、あるいは神官の説教を聞いた神社は何処なのか、管見では判明していない。ちなみに、養父太田時敏の住居は明治九年以前、第一大区小九区竹川町(現在の銀座)にあつたが、その近辺の「名の知れた神社」である芝大神宮には平田国学者の常世長胤が明治五年五月に祠官を拜命しており、彼またはその影響下の教導職の薫陶を受けた可能性があることは指摘できよう。⁽²¹⁾

新渡戸の『武士道』執筆の動機は、「序文」(一八九九年十二月)に次のように述べられている。

約十年前、私はベルギーの法学大家故ド・ラブレール氏の款待を受けその許で数日を過したが、或る日の散歩の際、私共の話題が宗教の問題に向いた。……私

は、「日本の学校に宗教教育がないのに、どうして道徳教育を授けるのかとの質問に即答できなかったが」私の正邪善悪の観念を形成して居る各種の要素の分析を始めてから、之等の観念を私の鼻腔に吹き込んだものは武士道であることをやうやく見出したのである。……一方にはラフカヂオ・ハーンとヒュー・フレーザー夫人、他方にはサー・アーネスト・サトウとチェンバレン教授との控へて居る間に挾つて、日本に関する事を英語で書くのは全く気のひける仕事である。ただ私が之等名なる論者たちに勝る唯一の長所は、彼らはたかだか弁護士もしくは検事の立場であるに對し、私は被告の態度を取り得ることである。⁽²²⁾

このように新渡戸は、日本人による日本論執筆へとみずから突き動かした背景に、西洋日本学者の存在があつたことを明記している。そこで名指しされた人々の反応のうち、B・H・チェンバレンの場合を確認しておきたい。

チェンバレンは『日本事物誌』第四版(一九〇二年)以降、「日本関係書」(Books on Japan)と「武士」(Samurai)の二項目で新渡戸の著述に触れている。ここではその初版(一八九〇年)と第六版(一九三九年)の記述の変化を見ておきたい。なお、出版当時最も売れたのは第五版(一九〇五年)で、日露戦争を契機に欧米における日本への関心が高まっ

たからといわれ⁽²³⁾。『武士道』増補版がニューヨークとロンドンで発行されたのも一九〇五年である。

まず「日本関係書」(Books on Japan)の項を比較すると、初版(一八九〇年)でライン『日本』、グリフィス『ミカドの帝国』、サトウ『中央および北部日本旅行案内』など十名(団体)をあげたのに対し、第六版(一九三九年)は、マードック『日本史』、グリフィス『ミカドの帝国』、アストン『日本文学史』、ラフカディオ・ハーン『見知らぬ日本の面影』・『日本―その解明の試み』他諸作品など十二名(団体)の文献を指摘した後、新渡戸らの著作を次のように解説している。

……幾人かの外国で教育を受けた日本人が、ヨーロッパの言語で本を書いている。この種の本で最近もつとも宣伝されているのが、新渡戸稲造の『武士道―日本の魂』と題する小さな本である。これはむかしの武士の行為を支配したといわれる実践倫理体系を、一般向きの文体で説いたものである。この著者の愛国的な情熱といくぶん面白い対照をなすのが田村〔直臣〕の『日本の花嫁』に描かれている日本の家庭生活の陰鬱な姿である。内村鑑三の『余は如何にして基督教徒となりしか』は、広範な読者層の興味をひくであろう。岡倉覚三の『東洋の理想』は、もし扉に日本人の名前

がなかったならば、ボストンの人が書いたものと思うかもしれない。次に挙げたいのは、新渡戸の論文『米国と日本の交渉(日米関係史)』、稲垣(満次郎)の『日本と太平洋』、南条文雄の『大明三蔵聖教目録』、それから日本とはほとんど関係ないが、野口米次郎のいわゆる詩は(カリフォルニアで)大評判となった⁽²⁴⁾。

つぎに「武士」(Samurai)の場合、初版(一八九〇年)は「この語を英語に訳せば……「戦士」・「軍人階級」・「紳士階級」であろう。……封建時代は一八七一年まで続いた……それでも、今なお貴族的精神が世の中に残っていて、平民が重要な地位に上ることを相当に困難なものとしている。」という簡単な記載だったが、第六版(一九三六年)には約八百字(日本語換算)の追加文章があり、「武士の訓練や仕事、守るべき道徳、あらゆる精神的環境が、中世時代におけるわれわれの貴族階級や紳士階級のそれら(騎士道)と著しく類似性を示していた。……ヨーロッパにおけると同様に日本においても……中央集権的絶対主義の下に色褪せて、遂に単なる虚飾と礼儀作法になってしまった……しかし、西洋と同じく東洋においても、強い色調を帯びた騎士道的感情が、現今にいたるまでも上流階級の間に生残っている」と述べる⁽²⁵⁾。さらに参考書を紹介する中で『武士道』を次のように批評している。

……日本の騎士道とその道徳についての理論的議論は新渡戸稲造の『武士道』を見よ。この最後に挙げた本は、日本人が優れた英語で書いたもので、その著者が封建時代の日本と比較する標準として中世ヨーロッパを採り上げずに、近代アメリカを採り上げていとう事実のために、この本の価値は相対に損なわれている。東洋と西洋の社会進化の対照は、実際は主として時代の対照である（日本はヨーロッパと同じ方向に沿って進展したが、もっと緩慢であった）。それなのに、その本では、場所と民族の対象として現わされている。⁽²⁶⁾

さらに、一九一一年発表の論文「新宗教の発明」が一九二七年第五版増補に収録され、第六版（一九三九年）では「武士道」と改題して、末文に「新渡戸稲造氏の『武士道——日本の魂』はこの論文で述べてきた見解に反対の立場をとる主要著作である」の一文が添えられた。⁽²⁷⁾その論文の要点は次の部分であろう。

天皇（ミカド）崇拜および日本崇拜（忠君愛國教）は、その日本の新しき宗教であつて、もちろん自発的に發生した現象ではない。すべての製造品は前提条件として、これを造るための材料を提供する。現在は、その依つてきたところの過去を必要とする。しかし二十世紀の忠君愛國という日本の宗教は、まったく新たな

ものである。なぜならば、この宗教においては、古来の思想はふるいにかけて選り分けられ、変更され、新たに調合されて、新しき効用に向けられ、重力の中心を新たにしたからである。これは新しいばかりでなく、まだ完成していない。これはいまだに官僚階級によって意識的に、あるいは半意識的に組立てられる工事の進行途中にある。⁽²⁸⁾

このように、新渡戸の『武士道』は西洋日本学者に刺激を与え、歴史（比較文化史）的視点の欠如などの批判を浴びることになった。さらに、チェンバレンの天皇崇拜ないし武士道を近代日本における新宗教の発明とする見解が、加藤玄智や村岡典嗣など明治末から大正期以降の邦人研究者に科学的日本研究の必要を再認識する契機にもなったことが知られている。

三、日本論の展開とその位置

では『武士道』の日本論・神道論にみられる問題意識や特色は新渡戸の生涯においていかに萌芽し、議論の深化を見せたのか。本節では主要な英文日本論の特色について、①手法や参照文献、②文明（文化）観、③明治維新観、④神道（宗教）観、⑤武士道観に注意しながら年次順に確認したい。⁽²⁹⁾

まず、『日米関係史』（ボルチモア、一八九一年）は明治二十四年・三十歳の作品でジョンズ・ホプキンス大学歴史・政治学叢書の一冊として同大学出版部より公刊された。「ペリー提督以前の外国との交渉」「ペリー提督とその先行者たち」「外交と通商」「日本におけるアメリカ人およびアメリカの影響」「アメリカにおける日本人」の五章で構成される。①手法・文献については「資料源としては、まず第一に、信頼すべき権威ある日本の著作に依り、第二には、諸外国の著書を参照し、第三には、私が叙述するのに努力した諸事件に直接関わりのある数名の日米両国人の方々と私信に依った」（序）と述べており、『日本アジア協会紀要』のアーネスト・サトウ論文や、ウイリアム・エリオット・グリフィスの『ミカドの帝国』などの著述を頻繁に引用している。②文明観では、「日本の文明の多くの要素は中国人と朝鮮人のおかげであり、またその後の制約の多くも彼らに負っている」（二章）と東洋文明に言及した上で、その「若い日本」の「国民生活は絶えず連続」しており、「大和魂」の遺産は日本国民のものであることを「将来に向けて真剣に考慮」すべきと述べる（四章）。③明治維新については徳川時代に宿された「強大な活力」が「維新時代」に姿を表した（一章）、「皇室中心主義の（維新）政府が取った方向は、……西洋化を追求すること」（三章）

であったが、その道徳的影響は否定的・功利的なものにとどまると指摘する（四章）。④神道観では「十七・十八世紀に」天皇の神聖な権利や血統のことを説き続けた純神道の「中国古典の復活と」時を同じくする復興」（二章）があったと言及する。⑤「武士道」という表現を用いてはいないが「政治制度としては失敗したとしても、社会制度としては多くの貴い道徳的特徴……個人の忠誠、強い名誉感、金銭をいやしむ誇り、勇気と禁欲を騎士のように賞めること、尚武の精神および英雄的な自己犠牲といった特質を、封建制度は育てた」（四章）と、維新以前の日本社会の道徳的特色を評価している。

既述の『武士道』（フィラデルフィア、一九〇〇年。ニューヨーク他、一九〇五年増訂）は明治三十三年・三十九歳の作品で、米国で療養中に著述された。①手法は前述の通り「彼ら（欧米日本学者）はたかだか弁護しもしくは検事の立場であるに對し、私は被告の態度を取りうる」と弁明の立場をとるとともに、「外国の読者の理解に近づける」ために「ヨーロッパの歴史および文学からの類例を引いて説明」した（序）。②文明観では「名誉の巖の上に建てられ、名誉によりて防備せられたる国家（が）……、屁屈辱の武器をもって武装せる三百代言の法律家や饒舌の政治家の掌中に急速に落ちつつある」として、維新以前の「祖先

の魂」への憧憬を述べる（十七章）。③明治維新については「王政復古の暴風と国民的維新の旋風との中を我が国船の舵取りし大政治家たちは、武士道以外の何らの道徳的教訓を知らざりし人々」であり、「劣等国と見下されることを忍びえずとする名誉の感覚」こそが維新の原動力であって、「殖産興業の考慮は、改革の過程において後より目覚めてきた」（十六章）と、武士道を評価する。④神道については前述の通り、主君忠誠・祖先尊敬・親孝行、原罪の教義がなく人の心が本来善であり神のように清浄と信じること、国土は祖先の霊の神聖な棲所であり天の力と仁愛を兼ね備えられる天皇は権威と国民的統一の象徴であること、忠君愛国を刺激という直截的な実践方法で武士道に提供したことを指摘している（二章）。⑤武士道観を集約すると「その表徴たる桜花と同じく、日本の土地に固有の花（道徳体系）（一章）であり、義・勇・仁・礼・誠・名誉・忠義・克己などの徳目に表れ、明治維新における「廃藩置県の詔勅が武士道の弔鐘を報ずる信号」であったが、今後「一の独立せる倫理の掟としては消ゆるかも知れない、しかしその力は地上より減びないであろう」（十七章）と述べている。

『日本国民』（ニューヨーク、一九二二年）は明治四十五年・五十一歳の著述で、日米交換教授（一九二一～二二年）として米国各地の大学で百数十回（延四万人）におよんだ講演

録である。新渡戸による包括的の日本紹介の最初の試みであり、東西相互理解を提唱し日本の地理・歴史・国民性・宗教・道徳・教育・経済・植民政策・日米関係を十二章構成で扱い、米講演の第一声「太平洋に平和を」を付録に収めている。①手法について、「東西」両者の統合の中にこそ、これまでわれわれの眼から隠されてきた「神祕」配剤のいくたの神祕が啓示され……（生物学における動物と植物、精神物理学における心と物のように）一見反対の性質をもつたものが相会し、結ばれる処女地にこそ、最大の収穫が期待」できるとして（二章）、諸科学の成果を総合した考察を試みようとする。②文明観では「帝國主義」が、熱狂的な誇大妄想にかられ、商業上の優位を渴望して、競争者をすべて相手とみるに留らず、仮想敵と見なすに至った」（二章）とコロニアリズムの問題を指摘し、「地理的島国性」「民族の均質性」「強烈な愛国感情」を特色とする太平洋上の日本の使命が「旧文明と新文明の仲介」にあると述べている（二章）。③明治維新は革命ではなく「王政復古」であり、「新日本はこの「五箇條の御誓文」の「開明政策」になつて治められ、「民衆は……サムライの地位まで引き上げられた」。海外から導入された「近代の諸制度」は前近代から受け継いだものの「成長の結果」であり「連続性」があるとし（三章）、日本人の「模倣力」「直観的知覚」が

西洋人の確信で強化されたと見ている(四章)。(4)神道の重要性については民族の芸術的・感情的気質に触れた上で日本固有・皇室の宗教の二点に求める。カミは一切存在の本質であること、祖先崇拜、神社は聖なる記憶の貯蔵所であること、神学・經典・信条を欠くものの「まこと」が道徳の本質を覆い(現実即真実)、罪を認めないという自然主義の弱点は否めないとしつつ、清浄・勤勉・国土・旧きもの・自然を尊重する特色を述べている(五章)。(5)武士道について「武士の道徳律は、国民の標準となつた」(六章)とし、廉恥心、克己、家名を挙げる(孝)の徳に触れて「武士道の伝統が……民主主義が進展するとともに衰えると、旧制度の教えもまた消え去らねばならない」(六章)と危惧する。高等教育はバン学間に陥つているとし、道徳の包括的縮図である「教育勅語」を渙発した統治者の非凡な洞察力を評価している(七章)。

『日本』(ロンドン他、一九三一年)は昭和六年・七十歳の著作であり、国際連盟事務局退任帰国後三年を経て脱稿、モダン・ワールドシリーズの一卷としてアーネスト・ベン社より刊行された。日本の現状への批判的視点を持ちながら地理・歴史・明治以降の近代・政治・教育・労働・思想生活(精神史)を取り上げている。(1)手法は「本書執筆に当たつて、私は心の眼の前に、たえず賢明なイギリスの読

者を二三人思い浮かべていた。その人たちは、……現在日本で起こりつつある様々の変化の根底にある思想や動機を理解しようとして、忍耐がよくも本書を精読してくれる人」であり、「同じ主題にも違つた角度(時局問題に対する比較文化的視点)から接近」したいと述べている(序)。(2)文明観を特色づける問題として「五箇條の御誓文」があり、憲政思想の嚆矢にして自由観念の種蒔きの証明書であるが、日本はなお人格性の基礎に乏しく、第二の維新が求められなければならない。大化改新と明治維新の二大改革の特徴として「皇室の權威の安定」「民衆の權利の拡大」「外国思想の導入」があり(四章)、義務教育の成果は「大衆の精神的・社会的向上」をもたらししたが、「御誓文」にいう「天地の公道」が蔑ろにされていると指摘している(五章)。(3)明治維新は「単なる政治上の出来事ではなかつた。根底において、知的・感情的であつて、それゆえ、その資源もまだ決して汲み尽くされてはいない」とし、「維新」の基調は、国民が、わけてもまずサムライが、王と国に対してとつた道徳的態度……忠君愛国(三章)の心に求めることが出来るとする。(4)神道について、「明治天皇は信仰を、目に見えぬ神」の心に人間の心が通ふことと定義し、日本の超道徳的自然崇拜と死者の追憶への崇敬には今なお生命力があること、「王政復古」は神道復権による」

ものであること、結婚式や教育福祉事業の普及で神道は民衆にいつそう近づいていくであろうこと、呪術性が顕著であること、「日本民族の情緒的要素の全体」であることなどを指摘している（七章）。⑤武士道をめぐって、日露戦争後「最も嘆かわしいのは、国民精神の道義的崩壊」（三章）であり、サムライ自身が近代日本の改革の創始者（四章）であったのに、こんにち大学での道徳的感化は微弱し、人文学分野では国家はまずい教師以下である（五章）。日本の徳の獨創性は要素でなく結合にあり、廉恥心・まこと（誠実実）・忠孝・成文化されぬ名誉の掟などが「教育勅語」に要約されているという（七章）。

『日本文化の講義』（東京、一九三六年）は昭和七年十月から十二月における米國カリフォルニア州大学での約二十回の連続講義を、新渡戸稲造の歿後メリー夫人が整理し、昭和十一年研究社より出版された。民族・社会・言語文化・心理・政治・経済・農業などのテーマを論じ、日本の国情の全体像を歴史に遡って解き明かそうとする。①手法について、「日本人の生活の中でも特に顕著な特徴のいくつかに通じてもらえるようにすることを目標とした。……厳正な科学的アプローチをとるつもりはない。私は、事実と理論とを、しばしばなんらの論評もせずに関連づけて、皆さんご自身に結論を出していただくようにしたい」（一章）

と述べ、従来の科学的成果を尊重する姿勢から直感重視への転向ともとれるような立場を示している。②日本文化の特色（国民的特徴）として、愛国心、国民的統一、忠義、国民的連続性、自己犠牲、義務感と責任感、名誉観、人生の悲哀についての快活な見方、感傷性、自然への愛と接触細目に関する特殊な才能、現実的な心理の十二項目を挙げている（十九章）。③明治維新を象徴する「五箇條の御誓文」について、英国のマグナ・カルタや米国の独立宣言が両国で占める地位に相当するもので、古代東洋の政治原理や伝統との別離と近代西洋の思想や伝統につらなることを明示しているという。「維新」は復古や復活のことで、その使命は新しい方法が古いものに求め、一国を支配する特殊な環境に合うように異文化を修正したのであり、御誓文は選択の基準を決定したと述べている（六章）。④神道については、宗教的信仰における意味を「神秘」に求め、その神秘主義は明治天皇の「目に見えぬ……」の御製に求められるとし、神を感情で察知する心情を説く。神道は厳密に土着で信仰以上の原始的本能・情熱という包括的なものであって、皇室の宗教でもあり、神ながら（魂の生来の純潔）を尊ぶ一方、極端に儀式的なため生活とかえって疎遠になっていると指摘する（九章。『日本国民』五章より数節引用したと付記）。⑤武士道とは、封建時代の名譽の思想原

理の支配下におかれたサムライ階級の道徳であり、こんにち衰えがみえるとしたらそれは名譽の伝統であつて、伝統は内に肉（秘められた生命の本質）を包んだ貝のようなもので、みずからの幼少の記憶は夢に過ぎなかつたのか、宗教的觀念に目を向けてみるならばその答えの一部が得られようと自問自答している（八章）。

新渡戸稲造は『日本文化の講義』を終えて昭和八年に帰国した際、「日本の歴史にさかのぼり、或は広く日本の国情に行き渡つて説明をなせば、其の方がむしろ永遠的の価値が多い。日本人は何を為しつつかあるかといふよりは、日本人は如何なるものかといふことが肝要である」と、米国人の日本歴史や国民性の觀察に供する方針を語っている。ここにはチエンバレンの批判を蒙つた明治期の『武士道』の際におけるアイデンティティの発揚という色彩よりも、「日本民族の主要な特徴について、純粹の賞賛や是認の形ではなく、ある程度の不利な批評をつけながら、日本人の短所が改善されることを祈念」するという、日本文化への批判的視点も加わっている。歿後に出版された『人生読本』（昭和九年）で、「自ら通訳たるを以て天職と心得ているため、西洋のことを日本語に通じ、日本のことを外国人に了解せしむるだけのことを以て務と信じ、自分で何の研究もなければ、人に優れた卓見もない」と文化の「通

訳」者を自認しており、新渡戸の日本論は、多分野の研究者の新しい成果を取り入れて自家葉籠中のものとし、探究を深めていった点に一つの特徴がある。しかしもう一つの特徴として、内外の多分野の新しい知見に触発されつつも、新渡戸が明治期に『日米関係史』や『武士道』で示した、明治維新後における「徳」の衰微の問題が語り続けられていくことも注目される⁽³²⁾。

四、『日本国民』の神道論とその周辺

——むすびにかえて

最後に神道論の展開について、内外日本学者の著述との連関性と、新渡戸自身の固有の問題、さらには時代性に着目しつつ、『日本国民』の記述を中心に検討する。

新渡戸の神道論は、明治期では『日米関係史』においてアーネスト・サトウ、『武士道』でラフカディオ・ハーン、『日本国民』ではウィリアム・ジョージ・アストン、久米邦武らの著述を引用し、昭和期の『日本』ではフレージャーの引用も見られる。とりわけ『日本国民』第五章「宗教信念」における神道の記述は分量も多く、その後の『日本文化の講義』の神道論も基本的に『日本国民』を敷衍しているので、これらの作品中で特筆すべきであろう。そこで以下、『日本国民』の第五章「宗教信念」を便宜的に①から

⑩の小見出しを付して要約する。

① 宗教の定義 信仰とは未来・過去を問わず「この世の生涯の彼方における自己の存在について人の信ずるところ」であり、その実践（とくに礼拝行為）がその人の宗教を構成する。この意味で日本人は生来の宗教的民族といえる。

② 芸術的・感情的気質 日本人は感受的でその信条を簡潔に述べられないが、「現世の存在は生の全体ではない」とを、その意識の奥底深くで感じている。

③ 神道の重要性 日本に芽生えまたは移植された宗教体系のうち「神道」が重要である理由は、「厳密に日本固有」で「民族の原始本能を集めた束とよんでもよい」こと、そして「皇室の宗教であるという事実」の二つに求められる。

④ 神ながら 「神道」の呼称が導入される以前の「神ながら」とは「人間の本源の無邪（気）」のことで、「カミ」とは「一切存在の本質」「心霊」であって、自然のあらゆる形や力となって顕現する。

⑤ 罪穢と禊祓 神道に原罪の教理はなく、ジョージ・フォックス（キリスト友会創始者）のように「人間靈魂の生得的純潔」「内なる光」を信じるが、マシュー・アールドの宗教定義（「情緒によって感動されたる道徳」、『武士道』第十五章「武士道の感化」で既述―佐藤注）に止まる。しかし心中の探求から罪ないし不浄を覚え、祓と禊によって清浄を

回復する。

⑥ 祖先崇拜 死者がどこかで生きているというのが、民族の強固な信仰であり、祖先の偶像でなく追憶・言葉・生前の善行を敬う。死者崇拜は起源がどうであれ「未開人の幽霊恐怖」とは異なるし、「東洋独自の弱点」でもない。靖國神社は、生者が「国の為死んだ人々を記念して」建てたもので、「彼らは不滅のものとされ、民族の記憶の至聖所に祀られている」。

⑦ 暗示の宗教 神道は「内省による暗示の宗教」であり、信条を定式化せず各崇拜者に委ねる。神社の調度はきわめて簡素であり礼拝の条件を提供するにとどまるが、参拝者はそこにたたずむと自分が宇宙の広大な構成の一部であると感ずる。

⑧ 清めと誠 神道には教祖・神学・経典・信条がないが、事細かな儀礼の主意は「清め」であり、道徳的指令の要点は自身の清浄である。「まこと」の語は「道徳の全領域、道徳の本質そのものを覆う」ものであり、神道の道徳はしばしば神々の託宣として表現される。

⑨ 自然崇拜 神道には理想への余地がなく、現存の王侯権力と結託し、人間の脆弱や罪を認めない。教えは全く実際的に身の清浄と勤勉を命ずるのみである。しかし神道を凌いで、国土や古いもの、自然の一つ一つの物への愛着を

教える宗教はない。自然崇拜から発した民族宗教といえる。

⑩ 儒教・仏教 神道が満たしえなかった知的・精神的な側面を儒教と仏教が担った。仏教伝来とともに神道は新しい信仰に呑みこまれ生命力を失ったものの、儀式の枠組みを保ち、「伝統と威信」によって人々を把握してきた。

以上の記述について、まず参考文献に着目すると、④の「神ながら」の説明は久米邦武「神道と君道」〔開国五十年史〕下巻、明治四十一年〕に示唆を得たと見られるし、⑤以下についても禊祓や神社の簡素な佇まい、清浄と誠を尊ぶ道徳性、自然崇拜、神仏関係史などの記述に久米およびアストン Shinto: *The Way of the Gods* (一九〇五年) を随所に採りいれている。しかしそれらの単純な引用で構成されているのではないことも明瞭であり、日本人の感受性、生来の内なる善神の尊重、祖先崇拜などについては、新渡戸が『武士道』から継続して語っている点といえる。

では、このような一貫した神道論は新渡戸の内面・外面のいかなる背景によるものであろうか。紙幅が尽き詳察は困難となったが、既述した少年期の大教宣布の感化以外に、旧南部藩士新渡戸家の神祇を尊ぶ環境、さらに明治天皇が明治九年・十四年の東北巡幸にあたり祖父傳の三本木原開拓の遺業を嘉賞されたこと（農学志向への転機）、カーライル『衣服哲学』からの感化とキリスト友会（クエーカー）

の信仰、大正四年の大嘗祭参列などを併せて検討することが重要と思われる。

祖父新渡戸傳は明治四年に歿し、生前より墓域と定めていた旧南部領三本木（現青森県十和田市）の大素塚に神道式で葬られたが、稲造は度々の外遊前後に墓参した。カナダで客死する五カ月前の昭和八年五月には、昭和天皇への三度の進講の名誉に浴した由を太素塚の神域に奉告し、「もし他地で死亡の時は祖父傳翁のそばへ埋葬して呉れ」と言って持参のステッキで丸を画いたという⁽³³⁾。

明治天皇の巡幸を契機とした農学への精励については、『農業本論』の「自序」に、「祖父の意思を継ぎ、皇恩の隆渥なるに報ひんとて、……余も亦始めて一身を農事に委せんとす⁽³⁵⁾」と述べ、その宿志を徳富蘇峰が『国民新聞』紙上で称賛した⁽³⁶⁾。明治三十八年四月十二日にはメリー夫人とともに、明治天皇に拝謁して英文『武士道』を献上、その際「稲造短才薄識、加ふるに病羸、宿志未だ成す所あらず、上は 聖恩に背き、下は父祖に愧づ。唯僅に卑見を述べて此書を作る。庶幾くは、皇祖皇宗の遺訓と、武士道の精神とを外邦に伝へ、以て国恩の万一に報い奉らんことを」という「上英文武士道論書」を草した⁽³⁷⁾。『農業本論』で「地方学^{かた}」(Ruriology, Ruris 田舎 Logos 学問)「すなわち地方の事象の顕微鏡的観察を提唱したのも、「回顧すれば明治維新、

国は一変して、粹を英仏に汲み、華を米独に咀み、従来の制度を種々刷新して、或は村落の分合を行ひ、自治制を布けるが如き、因つて以て従来の田舎社会を全然壊敗し了らしめ、我が地方学の研究に一大錯雜を来すに至りぬ」との憂慮を抱いてであつた。⁽³⁸⁾新渡戸の地方学の構想は明治四十三年より大正六年まで、小日向台町の自邸を会場に柳田国男・小田内通敏が幹事となつて催された郷土会に受け継がれ、さらには柳田の民俗学、小田内の郷土地理学、小野武夫の農村経済史研究へと発展する。⁽³⁹⁾

新渡戸稲造は大正十五年（一九二六）、ジュネーブ大学での演説「日本人のクエーカー観」で、「内なる光」への信仰を出発点とするクエーカー教義と、東洋哲学における自分の神霊が宇宙の神霊と靈的交渉を持つことを経験的に確信する宇宙意識とに共通点が見出せると述べた。⁽⁴⁰⁾また、一高生の矢内原忠雄に内村鑑三の宗教との違いを問われた際、「僕のは正門でない。横の門から入つたんだ。して、横の門といふのは悲しみといふ事である」と答えた。矢内原はその「悲しみ」について、幼くして郷里を離れて修学し、札幌農学校在学中に母を喪い、カーライル『衣服哲学』の実践奨励の思想との出会いにより煩悶を解決した経歴を指摘している。⁽⁴¹⁾新渡戸がクエーカーとなるのはジョンズ・ホプキンス大学留学中のことだが、カーライルが『衣

服哲学』第三巻第一章で、クエーカーの創始者ジョージ・フォックスを称えたことも道しるべとなつたであろうことは、すでに佐藤全弘氏が指摘したところである。⁽⁴²⁾新渡戸は『衣服哲学講義』で親知らずの主人公トイフェルスドレックの「誕生」に触れて「この本はまるで我輩のことを書いたやうに思つた」と言い、「真実のお父さんといふ者は天にある。真のFatherは肉体のものではない。……明治天皇の御製に、『眼に見えぬ神の心に通ふこそ人の心のまことなりけれ』とあるとほり、これが真実のfatherといふものである。——こんなことが書いてある。」と述べている。⁽⁴³⁾

新渡戸稲造が大嘗祭に言及した著述に、ロンドンで発行された*Japanese Traits and Foreign Influences*（『日本人の特質と外来の影響』、一九二七年）、早大での科外講演録『内観外望』（昭和八年）などがある。前者で、大嘗祭は「純然たる祖先崇拜」であるとし、「国土を統治されるのは父祖の力ばかりでなく、父祖の徳によるものであり、また天皇としての御職務は委託されたものであり、国家を管理するということであるというお考えが、『明治天皇の』御製の中に実にしばしば繰り返されている。われわれは明治天皇に、即位礼の秘儀に象徴されている理念の化身を見る」と述べている。⁽⁴⁴⁾後者は昭和三年の大嘗祭を間近に控えての講演だ

が、大嘗祭は日本固有ゆえに重要であり、「皇室の最良なる伝統が、潜在意識より浮出して来るやうに仕組んであり、……そこで始めて我が皇祖玄宗から伝つた我が責任、我が職務は何であるかといふことを、十分御自覚になることだらうと思ふ。それが大嘗祭の目的だろうと拝察する」と述べ、「その奥深い意義」の体験を提唱して話を結んでい(45)る。当時の『実業之日本』への寄稿に、「一定の時に沐浴をして一室を浄め、改めて其中に籠り、机の上に祖先の位牌なり父母の写真なりを供へ付け、……祖先の霊が眼前に在します如き心地を抱いて深夜心を俗事より離して、……祖先に対する感謝の念と、或は現在生へて居る両親等より受けた恩義……を顧みたならば、如何に吾人の心の奥底に潜在意識のある人情が湧き出て、人生観が一変するであらう」とあるように、新渡戸の進言した「大嘗祭の御主旨の体験」とは、祖先崇拜の体得による国民の感化にあつたやうに思われる。

むすびに新渡戸稲造と十一歳年下の加藤玄智（明治六年（一八七三）～昭和四十年（一九六五））との関係についていくつか補足すると、両者とも日本アジア協会に所属していたこと、加藤が明治四十五年の『我建国思想の本義』において新渡戸の『武士道』に触れつつ、武士道の発達史の形成という視点を提示したこと、さらに新渡戸が『日本国民』

においてアストン『神道』を通じて触れた『和論語』にも独自に関心を寄せて研究したことは夙に知られている。また東京女子大学図書館「新渡戸稲造記念文庫」所蔵の加藤著 *A Study of Shinto*（明治聖徳記念学会、昭和元年）の欄外には新渡戸によるとみられる鉛筆の線引きが随所にある。しかし、新渡戸が加藤の著述を直接活用したかどうかは判らなかつた。そこにもし両者の隔たりが反映しているとすれば、その背景には日本の伝統への実践的内面的探求と理論的学術的接近という力点の相違などがあつたかもしれない。

注

- (1) 拙稿「研究発表」近代の神道・日本研究と明治天皇論——加藤玄智を中心に」（『神道宗教』二〇六（第六十回学術大会紀要号）、平成十九年四月）。
- (2) 拙稿「明治聖徳論研究の課題と展望——明治神宮創建の神道学的理解に向けて」（『宗教研究』三五二、二〇〇七年六月）。
- (3) 新渡戸稲造の神道論に着目した先行研究に、笹淵友一「新渡戸稲造と東洋思想」（東京女子大学新渡戸稲造研究会『新渡戸稲造研究』、春秋社、一九六九年）、昭和女子大学近代文学研究室「近代文学研究叢書」第三十五卷（近代文学研究所、昭和四十七年）、佐藤全弘『新渡戸稲造——生涯と思想』（キリスト教図書出版社、一九八〇

- 年)、関岡一成『近代日本のキリスト教受容』(昭和堂、一九八五年)、岩瀬誠『新渡戸稲造の神道観』(『皇學館論叢』二九一三、平成八年六月)などがある。
- (4) 松下菊人『国際人・新渡戸稲造』、ニューカレント・インターナショナル、昭和六十二年、二三一頁。
- (5) 菅野覚明『武士道の逆襲』、講談社、二〇〇四年、二八一頁。
- (6) 笠谷和比古『武士道と日本型能力主義』、新潮社、二〇〇五年、一六一―一七頁。同『武士道概念の史的展開』(『日本研究』三五、二〇〇七年五月)。
- (7) 『新渡戸稲造全集』第六巻の当該頁(六〇六頁)に数行分の欠落が確認されるため、新渡戸稲造『西洋の事情と思想』、講談社、昭和五十九年、一六二頁を併せて参照。
- (8) 『新渡戸稲造全集』第六巻の当該頁(六〇九頁)に文章の欠落が確認されるため、新渡戸稲造『西洋の事情と思想』、一六五―一六六頁を併せて参照。
- (9) 丸山真男『近代日本における思想史的方法の形成』(『南原繁先生古稀記念 政治思想における西欧と日本』下、東京大学出版会、昭和三十六年初出、『丸山真男集』第十三巻、岩波書店、一九九六年)、九二―九三頁。
- (10) この視点はすでに大内三郎『キリスト教と武士道・序』(古川哲史・石田一良編『日本思想史講座』第八巻・近代の思想(三)、雄山閣、昭和五十二年、九九―一〇一頁)が提示している。
- (11) 新渡戸稲造『西洋の事情と思想』(『新渡戸稲造全集』第六巻)、五九六頁。
- (12) 新渡戸稲造(矢内原忠雄訳)『武士道、日本の魂——日本思想の解明』(『新渡戸稲造全集』第一巻、教文館、昭和四十四年)、三六―三七頁。
- (13) 新渡戸稲造『武士道』(『新渡戸稲造全集』第一巻)、三七頁。
- (14) 西義之『Bushido考——新渡戸稲造の場合』(『比較文化研究』二〇、一九八一年)。
- (15) 東京女子大学新渡戸稲造研究会『新渡戸稲造研究』、四一九頁。太田雄三『太平洋の橋』としての新渡戸稲造、みずず書房、一九八六年、一四頁。
- (16) 平川祐弘『西洋にさらされた日本人の自己主張——新渡戸稲造の「武士道」』(『大手前大学人文科学部論集』四、二〇〇四年三月)。
- (17) 新渡戸稲造(加藤武子訳)『幼き日の思い出』(『新渡戸稲造全集』第十九巻、教文館、昭和六十年)、六二九―六三〇頁。
- (18) 新渡戸稲造『武士道』(『新渡戸稲造全集』第一巻)、三六頁。
- (19) 松隈俊子『新渡戸稲造』、みずず書房、一九六九年、一八八頁。
- (20) 新渡戸稲造『西洋の事情と思想』(『新渡戸稲造全集』第六巻)、六〇二―六〇三頁。
- (21) 常世長胤(阪本是丸校注)『神教組織物語』(日本近代思想大系5『国家と宗教』、岩波書店、一九八八年)、三八四頁。太田時敏の住居については十和田市立新渡戸記念館の角田美恵子学芸員より教示をいただいた。
- (22) 新渡戸稲造『武士道』(『新渡戸稲造全集』第一巻)、一七―一八頁。

(23) 太田雄三「B・H・チェンバレン『日本事物誌』——複

数の存在を意識した日本論」(『国文学解釈と鑑賞』六〇—三、平成七年)。

(24) バジル・ホール・チェンバレン(高梨健吉訳)『日本事

物誌』1、平凡社、昭和四十四年、七五頁。

(25) バジル・ホール・チェンバレン(高梨健吉訳)『日本事

物誌』2、平凡社、昭和四十四年、一九二—一九三頁。

(26) 同右、一九四頁。

(27) バジル・ホール・チェンバレン『日本事物誌』1、一〇

二頁。

(28) 同右、八七頁。チェンバレンの『新宗教の発明』につい

ては、楠家重敏『ネズミはまだ生きています——チェンバレンの伝記』(雄松堂出版、昭和六十一年、第十一章「新宗教の発明」)などを参照。

(29) 以下は、新渡戸稲造(松下菊人訳)『日米関係史』(『新

渡戸稲造全集』第十七巻、教文館、昭和六十年、同(矢内原忠雄訳)『武士道』(『新渡戸稲造全集』第一巻)、同

(佐藤全弘訳)『日本国民』(『新渡戸稲造全集』第十七巻)、同(佐藤全弘訳)『日本——その問題と発展の諸局

面』(『新渡戸稲造全集』第十八巻、教文館、昭和六十年、同(松下菊人訳)『日本文化の講義』(『新渡戸稲造全集』

第十九巻)を参照。

(30) 新渡戸稲造「米国の対日態度に就て」(『改造』、昭和八

年五月号。『新渡戸稲造全集』第四巻、教文館、昭和四十四年、四六八頁。松下菊人『国際人・新渡戸稲造』、

一七四頁。

(31) 新渡戸稲造『人生読本』(『新渡戸稲造全集』第十巻、教

文館、昭和四十四年、二〇四頁)。

(32) 宮澤誠一『明治維新の再創造——近代日本の(起源神

話)』(青木書店、二〇〇五年)によると、「明治の「第

二維新」の運動が「大正維新」から「昭和維新」へ展開するなかで、五箇条の(「御」誓文の理念を「拡大」し、

民主主義を推進する方向から「王政復古」に依拠して幕末維新のラディカリズムへ「回帰」する途を歩んだのに

対し、歴史学と文学にみられる幕末維新像は、文化史から社会変革史へ発展するなかで、幕末の動乱によって翻

弄された武士や民衆の生活を歴史の基底におくことによつて、漸次「深さ」と「幅」を増しながら国民の歴史意識を形成していった」(二〇四—二〇五頁)。新渡戸稲

造の日本論をこのような近代の明治維新論のコンテクストにおいて捉えると、近代民主主義を性急に推進する政治的立場よりも、武士・民衆の生活を基礎とする歴史的

文学的国民意識を問題としていたことが確認できるように思われる。

(33) 川合勇太郎『太素新渡戸傳翁』、新渡戸翁顕彰会、昭和

十一年、二八頁。新渡戸憲之『三本木原開拓誌考』、岩間印刷所、昭和六十三年、一九七—二〇一頁など。なお、

太素塚は慶応二年七月に定められたが、翌年に新渡戸十次郎(稲造の父)が死去した際、傳が今後一切新渡戸家は神式に改めるとした旨、十和田市立新渡戸記念館の新

渡戸明館長より教示をいただいた。

(34) 佐藤全弘『新渡戸稲造の世界』(教文館、一九九八年、

八章「新渡戸稲造の皇室観」、原洋之介『「農」をどう捉えるか——市場原理主義と農業経済原論』(書籍工房

早山、二〇〇六年、I部2章「新渡戸稲造の農業本論」などを参照。

- (35) 新渡戸稲造『農業本論』（『新渡戸稲造全集』第二卷、教文館、昭和四十四年）、九頁。
- (36) 徳富蘇峰「農業本論を読む」（『国民新聞』、明治三十一年九月十八日）。
- (37) 新渡戸稲造「上英文武士道論書」（新渡戸稲造著、桜井鴎村訳『武士道』、丁未出版社、明治四十一年所収）。
- (38) 新渡戸稲造『農業本論』（『新渡戸稲造全集』第二卷）、二四一～二四二頁。
- (39) 岡谷公二『柳田国男の青春』、筑摩書房、一九七七年、二五五～二六一頁。
- (40) 新渡戸稲造『日本文化の講義』（『新渡戸稲造全集』第九卷）、四一～四一七頁。
- (41) 矢内原忠雄「新渡戸先生の宗教」（『嘉信』五八、昭和十七年十月）。
- (42) 佐藤全弘『新渡戸稲造——生涯と思想』、五三頁。
- (43) 新渡戸稲造『衣服哲学講義』（『新渡戸稲造全集』第九卷、教文館、昭和四十四年）、三七〇～三七七頁。
- (44) 新渡戸稲造（加藤英倫訳）『日本人の特質と外来の影響』（『新渡戸稲造全集』第十八卷）、四七七～四八四頁。
- (45) 新渡戸稲造『内観外望』（『新渡戸稲造全集』第六卷）、二八八～三〇四頁。
- (46) 新渡戸稲造「御大典に際し国民に進言す——国民は齋戒沐浴して大嘗祭の御主旨を体験せよ」（『実業之日本』三一～三二、昭和三年十一月十五日）。

付記 本稿は、神道宗教学会第六十一回学術大会（平成十九年十二月二日、國學院大學）および明治神宮国際神道文化研究所第一回所内研究会（平成二十年二月四日）での口頭発表をもとに執筆したが、第二節の記述には第二回日本学研究会（平成十六年九月二十五日、東洋英和女学院大学）での口頭発表「B・H・チェンバレンと村岡思想史」の成果が含まれている。本考察にあたり日本学研究会代表・岩手大学名誉教授の藤原蓮先生、大阪市立大学名誉教授の佐藤全弘先生、十和田市立新渡戸記念館の新渡戸明館長・角田美恵子学芸員、各研究会に参加の先生方に教示をいただいた。また新渡戸稲造記念文庫の閲覧にあたり東京女子大学図書館および渋谷区立中央図書館に便宜を図っていた。記して感謝申し上げる。

（明治神宮国際神道文化研究所主任研究員）